

理事長杯は大島。ホールインワンで花添える。

塩原カントリークラブの令和8年度クラブ理事長杯は9月27日に、36人が参加して開催された。理事長杯には大島義彰選手がグロス113（ネット104.0）で優勝した。大島選手は最終ホール（中2番）でホールインワンを達成、優勝に花を添えた。

▽ 上位入賞は以下の通り。

- ①大島義彰 104 ②熊田俊彦 106.8 ③後藤正満 107.3 ④佐藤義宏 108.1
⑤稲垣浩 109 ⑥関家修 110.4（敬称略）

理事長杯優勝 喜びの声（大島義彰選手）

4年ぶりの優勝を飾ることができ大変うれしいです。

メンバーに恵まれ最終ホールまで集中することが出来ました。スタート南コースは気負い過ぎてスコアがまとまらなかったものの、北コース、中コースは丁寧にまとめることが出来ました。これも同伴のメンバーに恵まれ緊張の中にもリラックスできたことが勝因です。また、中コース2番では人生2度目となるホールインワンも達成することが出来ました。公式競技での出来事で、嬉しさも倍増です。

これからも4大競技すべての頂点を目指して精進していきたいと考えています。今後ともよろしくお願い致します。

正義の味方の「たたき」？

後期高齢者ならご存知だろう。「黄金バッド」といえば少年時代に読んだ少年漫画では、正義の味方のコウモリだった。しかし、今では中国でコロナの感染源となったウイルスの宿主のような嫌疑をかけられすっかり悪者になってしまった感がある。そのコウモリが塩カンの地下部分にあるカート置き場でとんだ騒動を起こしていた。

9月に入って早々、キャディーさんから「カートに動物の糞がについて困った」とクレームが出た。堀越社長らがカート室を調べてみると、薄暗い奥の方の床に大量の糞がたまり、4匹ほどのコウモリが天井に下がっていた。

とりあえずそれらを追い払い、市販のコウモリ忌避剤を買ってきて吊したが一向に効き目はなく、逆に増えるばかりで、一時は20匹ほどに増えて攻防戦の様相となった。出入り口をふさぐほかないと目の細かい網を買って来て、それまで開放していた出入り口を塞いでみた。

大量には出入り出来なくなったが、最初に住みついていたとみられる2匹だけは出入りしていた。「これが引き金になってまた増えたら困る」と2匹を捕獲、1匹は那須の湯本、他の1匹は宇都宮の方で放した。結局、これが功を通じ2週間にわたった攻防戦は人間に軍配があがった。

床に溜まっていた糞の量は約10kgほどもあり、元々の住人はかなり以前から住み着いていたようだ。毎日、出庫前の糞掃除に悩まされていたキャディーさんたちもホッとした様子。

ただ、この作戦に積極参加した社長が原因不明の咳に悩まされている。レントゲン検査でも医師からは「悪いところはない」と太鼓判を押されているが、正義の味方からの「たたき」かもしれない。



10月の視察

インバウンドの集客にひと肌。10月に台湾から視察プレー。

9月29日～10月2日、那須塩原市でのゴルフツアーの楽しさを台湾のゴルフ愛好者にPRしてもらう試みで、台湾の旅行社4社を招待して、塩カン、ホウライ、西那須野カントリークラブで視察プレー、塩原、乃木温泉での宿泊、温泉を楽しんでもらうファミツアーを実施した。
塩カンでは、10月1日に視察が行われた。





新企画スタート！

塩原カントリークラブのコース管理を委託している、「株式会社那須ナーセリー」の落合潤社長に、エッセーを書いていただく事となりました。



【エッセー】

Green Road ① ～緑に魅せられ 50 年～
「自分で育てる…」グリーンに息づくパイオニア魂。

落合 潤

グリーンキーパーがスタート

「那須ナーセリー」が塩原カントリークラブのコース管理をお任せいただくようになってから、ゴルファーの皆様グリーンやコースの状態をお褒めいただくように少しずつなっていました。しかし、私たちがお届けしている「美しい緑のステージ」の裏には半世紀前に私どもの創業者が抱いた強い情熱と、日本のゴルフ史を動かした大きな挑戦の物語があります。

時計の針を私たちが創業した 1973 年(昭和 48 年)前へ戻します。東京生まれだった創業者の落合正は、大学の恩師からの紹介で、名門・那須ゴルフ倶楽部に職を得ました。そこでゴルフ場の現場管理を一から学び、芝生のプロフェッショナルである「グリーンキーパー」になったことが、すべての始まりでした。

当時の県内のゴルフ場は 1936 年(昭和 11 年)にオープンした県内最古の那須 GC から日光 CC(1955 年)、小山 GC(1960 年)、宇都宮 CC(1961 年)、塩原 CC(1969 年)などのオープンが続き、那須ナーセリーが産声をあげた 1973 年(昭和 48 年)には烏山城 CC がオープンしまして、県内のゴルフ場は 18 コースになりました(現在の県内の営業コースは 113 コース)。その 2 年後の昭和 50 年(1975 年)は、全国のゴルフ場が 1000 コースとなり、第二次ゴルフブームと言われました。

買えぬなら自分で…

当時の日本のゴルフ場は、在来種である「高麗芝」のグリーンと寒地型の西洋芝である「ベントグラス」のグリーンが混在している時代でした。冬でも青々とした美しさを持つベントグラスですが、当時の技術では日本の高温多湿な夏を超えることが極めて難しく、夏を過ぎるころには激しいダメージを受けてしまいました。それを克服するのが、大きな課題だったのです。

さらに深刻だったのは、グリーン造成のための 20×20 ㍍の小さなベントグラス(切芝、苗)が、当時の「本州」にはどこにも販売されていないことでした。「手に入らないなら自分たちで育てるしかない」。父・正の思いの行く先はその一点でした。

「日本のゴルフ場のグリーンを、一年中絨毯のように青々と輝く本場のグリーンにする。ベントグラスを本州の地で自ら生産し、全国のゴルフ場へ供給する」正が本州初のベントグラスの生産のために選んだ理想郷こそが「那須」でした。43 歳での創業でした。那須高原の冷涼な気候、風通しの良い地形、そして豊かな水(降雨)



と排水のいい土壌の大地。これこそがデリケートな寒地型西洋芝を健康にかつ力強く育てるための「日本で唯一無二」の地だったのです。グリーンキーパーとして培った本能が、正の背中を押したといえるでしょう。



今に息づくパイオニアの心

よく使われるゴルフ場管理用語の「ナーセリー」とは、傷ついたコースを修復するために芝生を大切に育てる『苗床(育成地)』を意味します。社名には単なる園芸会社ではなく、本州のゴルフカルチャーの足元を支える苗床にならんという決意が込めました。

あれから半世紀。カップインをねらうパッティンググリーンの下には、日本の緑化の歴史を切りひらいたパイオニア精神が息づき流れているのです。

筆者略歴

落合 潤(おちあい じゅん)

1963年10月那須町生まれ。地元の小中学校から黒磯南高卒。

機械関係の専門学校(東京)を卒業後、アメリカに語学留学、ホームステイ先がガーディナーの家庭で、芝についても実地に教わる。2年半で帰国。その後、創業者の父から那須ナーセリーを継いだ。



【那須ナーセリー 本社】



塩原・11湯の四季 最終回

【長月(ながつき)】

塩原御用邸 ～木立を渡る歌声～

高原 泉

塩原温泉郷に御用邸があったことをご存知か。福渡にあったのである。

三島通庸と言えば塩原三恩人の一人。幕末から明治にかけて活躍した官僚で、とくに那須野が原開拓、塩原新道の開削に寄与した。三島は福渡に別荘を建てた。当時、皇太子であった大正天皇が、避暑や静養のために別荘地を探していた。三島の別荘を借りて滞在した時、塩原の自然、温泉を気に入り、三島家が宮内庁へ献上を申し入れる。1910年(明治43年)のことだった。

以来、大正、昭和初期にかけ、貞明皇后(大正天皇の皇后)、皇太后節子(昭和天皇の母)がしばしば長期滞在した。1888年に出来た那須御用邸が宿泊、執務、御学問のフル機能を持っていたのに比べ、塩原はサブ的な感じだった。日光の田母沢御用邸の格式と建築美が強いものとも趣を異にした。

塩原御用邸は広い庭園と林を含む静かな敷地に、箒川を望み川風が良く通った。和風数寄屋造りの木造平屋建で、御座所、侍従部屋、女官室、庭付き回廊、湯治に備え、温泉をひいた湯殿が備えられた。華美さを抑え、あくまで静養を意識された。

貞明皇后は病弱な大正天皇を支えたが、自身も静養を必要とし、塩原の自然と温泉を大変気に入られた。朝早く箒川沿いの朝霞の中をゆっくり歩かれ、草花、溪流の音、朝の冷気を楽しまれた。散策中、道の横に咲く山野草を見て、侍従に「誰が植えてくれたのでしょうか」と尋ねられたという。皇后が神経痛や体調不良に悩んだ時、医師団は温泉療養を勧め、日に2回はゆっくりと入浴、読書、和歌、書写などを静かな和室で楽しんだ。

塩原の子供たちが皇后の対座中に奉祝歌を歌い、菓子や絵はがきを下賜されることもあった。皇太后は昭和期になってしばしば塩原で静養した。昭和天皇の健康や国際情勢の中、東京を離れたい心境になったのかもしれない。庭には皇太后のお印の藤棚が整備され、侍従たちの心遣いが偲ばれた。地元の植木職人はこの藤棚の手入れを誇りにしていたという。

宮内省の記録から、皇后、皇太后の献立を再現してみる。

(朝食)

白粥または白飯、梅干し、豆腐とわかめの味噌汁、茶碗蒸しまたは卵焼き、焼き鮭、牛乳・季節の果物

(昼食)

にゅうめん、または上品な吸い物、川魚の塩焼き(ヤマメ、イワナ、山菜の和え物(みず、ぜんまい、こごみ)、炊き合わせ(里芋、人参、昆布)

(夕食)

白飯、吸い物(松茸、じゅんさい)、お造り(那珂川の鯉)、煮物(山菜、地元野菜)、焼き物(川魚)、和牛の空き煮(に)、デザート(寒天寄せ・果物)

地元の記録には、皇后様が森の道を散歩する時は「不思議と風がよく吹き抜けたという。皇后は深いエメラルドの箒川の淵から聞こえる水音を「硯に筆をあらうような」と表していた。

御用邸は昭和21年に失明者の社会復帰施設として払い下げられ、昭和56年に「天皇の間記念公園」に天皇の御座所だけが移築され、県文化財として保存されている。



【中里鉄也の目・Q&A】

Q：池越えショットが上手くいきません。どうしたら上手くできますか？

A：池越えのショットでミスが出てしまうのは、プレッシャーから無意識に体が力んでしまったり、「ボールを上げよう」としてスイングが崩れてしまうことが主な原因だと思います。
プレッシャーに負けず、池を確実にクリアするためのコツをまとめてみました。

1. 番手をひとつ大きくする — 余裕を持たせる —

池を前にすると「届くかな」という不安から力みが生じやすくなります。あえて1クラブ大きめの番手（飛距離が出るクラブ）を選択し、8分目くらいの力加減でゆったり振ることで、ミスへの許容範囲を広げましょう。

成否の確認：「いつものフルショットよりも抑えて振っている感覚があるか」「トップせず芯で捉えられているか」を確認します。

2. ボールを無理に上げようとしない — ダフリ・トップを防ぐ —

「池に入れたくない」という心理から、すくい打ち（ボールを無理に上げようとする動き）になりやすく、これがダフリやトップを招きます。クラブのロフト角が勝手にボールを上げてくれると信じ、普段通りのクリーンなコンタクトを心がけましょう。

成否の確認：インパクト後にクラブヘッドが低く真っ直ぐ出ているか、すくい打ち特有の「あおり打ち」になっていないかを確認します。

3. ボールの行方をすぐに見ない（ヘッドアップの防止） — 軸を保つ —

池が視界に入ると、結果が気になってインパクト前に顔が上がり（ヘッドアップ）、身体が開いてミスにつながります。打った後もしばらくはボールがあった位置を見続ける意識を持ちましょう。

成否の確認：スイングが完了するまで、左耳（右打ちの場合）が右肩についたままの感覚を維持できているかを確認します。

4. いつも通りのルーティンを守る — プレッシャー対策 —

アドレスに入る前の手順（素振り、目標の確認、深呼吸など）をいつも通りに行うことで、脳を「いつもの練習モード」に切り替えます。池の存在をいったん忘れ、目の前のターゲットだけに集中しましょう。

成否の確認：アドレスに入ってから余計な雑念が消え、決めたリズムでスムーズにテークバックに入れたかを確認します。

※もしかすると、ただ単純に「池を意識しすぎて、体に力が入っているだけ…」という事も考えられます。
あまり池がある事を意識しすぎないことが大切です！

※「中里鉄也の目・Q&A」コーナーは、今回で最終回となります。

ご質問をいただいた皆様、楽しみにして下さった皆様、有難うございました。



編集後記

「那須の小天狗」。那須ゴルフ倶楽部を語る時、日本オープンゴルフ選手権、日本プロシニアゴルフ選手権各2勝のキャディーあがりの所属プロ・小針春芳の名を思い起こす。忘れてはならない先人がもう一人いる。ベントグリーンを定着させた落合正である。こちらは那須GCのグリーンキーパーあがりだった。草創期の那須GCでは、スタッフが前夜にメンバーの別荘を訪問して、スタート順を知らせたという。そこに、小天狗となるキャディーと緑の絨毯に人生をかけたグリーンキーパーがそろっていた。独自のゴルフカルチャーが漂っていた。「塩原・11湯の四季」を終了し、緑に魅せられた落合の50年をご子息の潤氏に「Green Road」として書き継いでいただく。那須の大地の物語である。

井上安正

